駅逓情報

第8号

時評

○　過日死去した、ノーベル化学賞受賞者、福井謙一氏は、ひらめきを大切にした人である。そのため、寝るときには必ず枕元に紙と鉛筆を置いていたという。それは、夜中や未明に何かを思いつくとメモをしておくためである。

このことは、誰でも出来ることではあるが、その誰でも出来ることが出来ないのが凡人であるか。

○　駅逓史が完結してからもう二年が経つ、続いて、「北海道郵便創業史」を書いてきた。それも本年後半には発刊される見通しとなった。

駅逓史も、私の全知全能を傾注したものであったが、今回の、郵便創業史も私の所蔵資料を駆使して、心血を注いで書き上げたものである。特に心掛けたことは、現在でもそのような傾向にあるが、中央の役人は、通達一本を出すことによって、全国一斉に同じ歩調で、中央の意志どおり動くものと思い込んでいる風がみられる。

特に、北海道は、中央志向が強いといわれているので、今回は、極力、北海道の独自性をみだして強調することに努めた。これは、難しいことではあるが、ある程度は生かされたと思っている。好御期待。

目次

一　時　評 …… 1
二　特殊な形態の駅逓を探る
　法制上幻の施設「休泊所・出張所」（下） …… 1
三　三崎山街道の一里塚と
　札幌本道の里程標杭を比較する …… 2
四　事務局便り …… 4

特殊な形態の駅逓を探る

法制上幻の施設「休泊所・出張所」（下）

前号に引続き出張所について記述する。

右「上」にも記述したとおり、出張所は、法制的には表面に出てこない施設である。実際には、親駅逓所の付属施設として設けられ、駅逓所間の中間に、中継ぎ的施設として設けられたものである。しかし、その機能としては親駅逓所と何ら変らないものである。

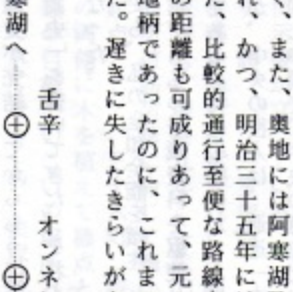
地域的には前号のとおり道東方面に多く設けられた。以下、引続き記述する。

（三）　舌辛駅逓所大楽毛出張所

駅逓名称	所在地	開設年月	廃止年月	取扱人
古平	古平郡	明治三五・一	大正一五・一〇	①百姓 ②小村定義
出張所名称	所在地	開設年月	廃止年月	備考
大楽毛	舌辛村	大正六・九		

太平洋沿岸沿い釧路・白糠間七里八町三十五間の中間点にあり、そこから分岐、阿寒湖に向かって北上する丁字路沿いにある。大楽毛から親・駅逓所の舌辛までは五里三十八町である。

古来、同所は太平洋岸街道沿いにあって交通量も比較的多く、また、奥地には阿寒湖及び網走方面への通路も開かれ、かつ、明治三十五年には馬車軌道も開通するといった、比較的通行至便な路線上にある。そのうえ、隣駅との距離も可成りあって、元々、駅逓施設を必要とする土地柄であったのに、これまでなぜか設けられていなかった。遅きに失したきらいがある。



（四）　ルベシベ駅逓所ピリカネップ出張所

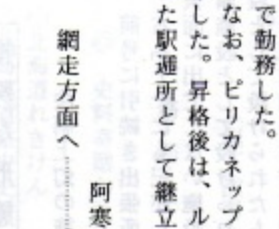
駅逓名	住所	開設年月	廃止年月	取扱人
ルベシベ	阿寒郡	明治四三・九	大正一五・七	鈴木善蔵
出張所名	住所	開設年月	廃止年月	備考
ピリカネップ	網走方面へ	大正一二・一二	昭和九・五	大正十五年七月駅逓所に昇格（取扱人　鈴木善蔵）

前「（三）」項に記載の、大楽毛出張所の延長線上にある。阿寒街道を北上し、ルベシベ駅逓所からさらに一里十八町の地点に、同所取扱人鈴木善蔵によって設けられた。同所からさらに二里十八町北上すると、阿寒湖畔に至り網走方面へ通ずる路線がある。

周辺は、明治二十八年、舌辛原野の開拓、入植区画の設定によって、入植者が漸増しつつあったが、その前の明治二十八年、アカン岳山麓における硫黄採掘に伴う搬送通路として通行人が増加するなど、地場産業開発も活発で、街道は賑わいを見せ駅逓業務は繁忙を極めた。

大正十五年七月、ルベシベ駅逓所廃止に伴って、ピリカネップは昇格し、鈴木善蔵がピリカネップに移って、引き続き駅逓取扱人に就任した。以後、同所廃止に至るまで勤務した。

なお、ピリカネップ出張所は、宿泊・休憩を主体に営業した。昇格後は、ルベシベの継立業務を継承し、独立した駅逓所として継立業務をも合わせて経営した。



（以下次号）

三崎山街道の一里塚と札幌本道の里程標杭とを比較する（その一）

昨秋、北国街道「酒田ー秋田ー角館」間をバスで通行し、その間の、要所要所で下車して街道筋の史跡を見聞してきた。

その途中にある三崎山街道沿いの一里塚を少し詳しく調べてきたので、札幌本道開削のさい建設した里程標杭（みちしるべ一里塚）と比較して、その相違点、時代の変遷等を考察することにしたい。

（一）　三崎山街道の一里塚

まず最初に、三崎山街道の位置、一里塚を作るに至った経緯等について検討する。

三崎山街道は、北国街道の中間の一区間をいう。北国街道は、江戸時代には秋田藩の城下町、久保田（現在の秋田市）から、海岸沿いに南下して山形県境、三崎山までの間と一応定められている。

しかしこれは、明確な名称ではなく、秋田街道とか酒田街道ともいわれている。

記録によると、秋田から庄内方面に向って南下するときは「酒田街道」と、北上する場合は「秋田街道」と称える習わしになっている。

全国、いずれの街道にも関所と、旅人が泊る宿場があることは御承知のとおりであるが、さらに、旅人の通行の目安となる道標（みちしるべ）がある。宿駅制の史料によると、道標は、一般に石材で作られた塔形のもので、その側面に「右○○○、左○○○」という工合に、おおむね平仮名で、行き先が彫られていることはよく知られている。有名な木曽路の北の入口「塩尻宿」にある道標には「是より南、木曽路」と彫った石碑が立てられている。

さて、一里塚のある三崎山街道であるが、「山」とあるので、山回りと浜回りの二路線があるのかと思いきや、この山街道は海岸沿いの崖上を通っていて、なぜ、山街道と称するのか明らかでない。確かに、相当遠方ではあるが内陸部に古来地元民が通行したと思われる山路があり、そこに「三崎峠」がある。しかし、その山道は裏街道で、参勤交代の藩主等が通行する表街道は海岸路線を通行したもののようである。

一里塚のある地点は、三崎公園に近い海岸沿いにあるので、北国街道はこのコースであったことは明らかである。いずれにしても、北国街道、又は、秋田街道に関する史料は、以上記述したこと以外には見当たらない。

象潟（きさかた）町発行の、「象潟の史料」誌によると、「三崎街道、今から凡そ一、二〇〇年前の貞観年間、茲覚大師が東北行脚の際、この地に来て三崎山に道路のないことを見て不便に思い、地元民の協力を得て開削をしたもの」であると記述されている。さらに、

○　一里塚について

秋田県史跡に指定されていて、三崎山旧街道の中間にある。この一里塚は、慶長九年（一六〇四）年、徳川幕府が奥羽その他の街道筋諸藩に命じて築かせ、江戸日本橋を起点として三十六町ごとに道路の両側に木を植えて標点としたものである。旅人たちが里数の目標、憩いの場所とした所で、この、一里塚には榎（えの木）を植えたとしている。恐らくこれは、北国街道ばかりでなく、幕府道中奉行支配各街道すべてに指示されたものであろう。

以上、一里塚を作ったさいの経緯を史料によって記載したものであるが、これら街道や一里塚は現在どのような状態になっているのであろうか。私は、この目で確かめようと現地を訪れた。

私は、酒田からバスで北上途中、「有耶無耶の関」を通過し三崎公園に至りそこから徒歩で旧街道を歩いてみた。街道は幅一メートル位いで、石畳敷である。雑草がおい茂っているが辛うじて路面が見える。石畳といっても現在は磨り減っていて、かっての往還の盛況と歴史の古さを感じさせるだけで、路面がやっとわかる程度である。旧街道を五十メートル程歩いてみたが、石畳はまだ先まで続いているようである。公園に戻って二キロメートル程北上し、今度は逆コースで酒田側へ数十メートル歩くと、「一里塚」の標示板が立っている。そこから五

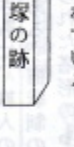
十メートル程旧街道を歩くと、緩やかな坂がありこれを登ると「一里塚跡」のある地点に着く。「一里塚」そのものは辛うじて塚が見える程度で、植えたという榎はもちろん残っていない。路面は、三崎公園側と変らず、石畳が続いている。塚のあったと認められる地点には、左記の掲示板が立っている。

「　史　跡　　一里塚跡

秋田県史跡に指定された三崎山旧街道の中にあるこの一里塚は、慶長九年（一六〇四年）徳川幕府が奥羽その他街道筋諸藩に命じて築かせ、江戸（東京）日本橋を起点として、三十六町（四キロメートル）ごとに道路の両側に木を植えて標点としたもので、旅人たちの里数の目標といこいの場所とした所で榎（えのき）が植えられているこの一里塚は非常に珍しいものである。

象潟町教育委員会」

また、その横に次の標木が立てられている。



なお、「一里塚」は、諺にもあるように「冥途の旅の一里塚…云々」と、庶民の間にもよく知られている。幕府の指示により五街道を始め各街道にいたるまで設けられていたものであるが、一里塚のほか元和四（一六一八）年には、並木の植樹が行われた。これも、一里塚と類似の利点がある。夏には、旅人が休めるような木陰をつくり、冬には吹雪を免れるようにしたものである。東海道では、西からの敵が江戸へと攻めのぼろうとする際、切り倒して侵入を防ぐ手段としたのであった。

しかし、この並木も東海道筋では、道路の拡張工事や新東海道の建設費用に当ててしまったという。全国的にも、このようにして各街道に植樹された並木は、その一部を除いてはほとんど残っていない。また、一里塚についても、時代が下るにともない全国的にも荒廃してしまい、諺のみ残って実際の施設は跡形もなくなったものである。

（以下次号から札幌本道について記述する。）

事務局たより

◎　史料寄贈お礼

○北海道れきけん　　森川　隆氏
○北海道道路史史料　　石井　宏道氏
○札幌本道開拓使事業報告　第二編　　石井　宏道氏

発行年月日　平成十年二月一日
領　布　無　料
発　行　者　〇〇五　札幌市南区川沿四条五丁目　三ノ一
史学研究会代表　宇　川　隆　雄